特集

高齢者のためのファッションセラピーへのアプローチ

特別養護老人ホームにおける装いの工夫の働きかけ —自然感情を中心とした試み—

山 岸 裕 美 子

特別養護老人ホーム入居者2名に対し、装いの工夫の働きかけを実施して日常の様子を経過観察し、働きかけ前と後との様子について評価した。

1. はじめに

かつて加齢の本質を衰退として消極的に定義する傾向があった。しかし近年、老年学の研究が盛んになされるにつれ、生涯発達の考え方に関心が寄せられ、高齢になっても何らかの獲得が認められるとされてきている。

そこで、加齢を一方的な衰退と見なすのではなく、高齢期ならではの特性をとらえ、それらをうまく生かした上で「生きがい」にまでつなげていくことも可能であると考え、そして、高齢者の持つ特性としてあげられるのは何といっても、長い人生経験の中で体得してきた多様な感性や文化的知識体系であろう。これらの深みのある特性を生かし、新しい表現を行っていくことも可能なのではなかろうか。

そのための有効な手段となるのが、まさに「装い」である。衣服にはまず、寒暑や外界の刺激から身体を保護したり、汗や污垢を吸収し皮膚の衛生を保つなどの物理的機能があることは周知の通りであるが、一方、忘れてはならない重要なものが精神的機能である。衣服とは一度身に着けると着替えない限りその人物とともに存在し、そのひととなりや饒舌に語るものともなる。我々は衣服をそれぞれの持つ美意識により選び、それらを装うことで「自己表現」を行うのである。

そこで、高齢者が自らの生活の中で長年にわたつ

て築いてきた感性や価値観に基づく、自分らしい納得のいく装いをして自己を表出することにより、生活の中に新たな楽しみを見出すことができると考えた。

しかしまた一方、この装いの動機となるものとして、誰もが共通に持ち、また共感することのできる普遍的な要因も存在するのではなかろうか。

本稿においては、単に装いの工夫を凝らす楽しみだけでなく、装いを決定する際の動機となるものとして、高齢者の持つ自然に対する感情や感受性に着目した。自然に対する思いは季節感に代表され、誰でもが共通かつ平等に持つことができるものである。日本人は自然を肯定し、自然の法則に参加して生きてきたという文化の背景を持っている。我々は四季それぞれの草花や風物に親しみ、それらを日常生活の中で享受してきたのである。そして、それぞれの季節に対する共通の原風景なるものを心の中に持っているといえよう。このような自然感情を内に抱きながら、それを動機として装いを行うことができれば、満足度はより大きなものとなるのではなかろうか。

かつて人生の中で様々な衣服を着用してきた高齢者が装いによって自己を表す際、その動機となるものがより納得のいくものであり、かつ自信の持てるものであることが必要なのである。そのためにも、感覚的なおしゃれとは異なった、普遍的な要因である自然感情に基づく装いは、日常生活の中に活気を

Approach by Dressing in Special nursing home for the Aged-Mainly of the feeling of holding communication with nature, YAMAGISHI Yumiko, 群馬社会福祉短期大学, Gunma Social Welfare Junior College

与え、自己表現をより確かなものとしてくれるであろう。そしてそれが「生きがい」にまで発展していくことも可能と思われるのである。

本稿においては特別養護老人ホームの利用者を対象として働きかけを行ったが、現在このタイプの施設においては、生活の基本である「衣食住」のうち衣の部分が疎かにされがちであるといっても過言ではない。生命の維持のため、あるいは病気等に配慮しての食事のメニューの工夫には力が入れられており、また住空間は、近年よく耳にするバリアフリー構造がとられ危険防止に細心の注意が払われている。ところが衣生活については、衛生には気を使い洗濯こそ行うものの、1日中パジャマで過ごしていたり、または就寝前に着替えは行わず、日常着のまま24時間を過ごすことを良しとしている施設がまだあることは否定できないのが現状である。ところが皮肉なことに、衣服は施設内においては、個人の選択の自由の幅が一番大きい部分となっている。つまり、食事のメニューや食器、居室の造作やインテリアなどのように、あらかじめ決定されてしまっているものとは異なり、個人個人が身につけるものであるところから、希望するものを用いることが可能な貴重な“場”なのである。さらに、施設内で利用者が用いている衣服は入居前から自宅を着用していたものを持ち込んでいる場合がほとんどであり、それら1枚1枚には過去の様々な生活史が込められてもいるのである。従って、施設生活において自己を思いきり表出するためにも、衣服を手段とすることは最も有効であるといえよう。

2. 方法

群馬県内にある特別養護老人ホーム利用者2名に対し、装いに関する次の働きかけを行った。

調査期間は1998年5月～1999年1月である。

2.1 衣生活そのものを見直し、装いに対する新たな発見をするための働きかけ

高齢者が現在所持している衣服を用い、ファッションコーディネートを中心とした装いの工夫をする働きかけを行った。

これを行うに際し、まず衣生活そのものについての見直しを行った。所持している衣服をすべて見せていただき、1枚1枚コミュニケーションをとりながら確認していった。次に、居室に人台を持ち込み、上衣と下衣とをこれに着用させてみることによ

り組み合わせを考えた。また、実施したコーディネーションを毎回写真に撮り、アルバムとして残し、その後の参考となるよう配慮した。

2.2 自然感情を踏まえた装いの働きかけ

施設において、季節の花を飾ったり壁面に季節にちなんだ装飾を施す等の工夫がなされているのはよく見かけるところである。しかし、それらを受動的に受け止めるだけでなく、季節感を自らの装いの中に能動的に表現することができるよう提言を行った。また、毎月の誕生日会をはじめ、お花見、納涼祭(夏祭)、菊見学等々、季節の行事が企画されているが、これらの催しに参加する際の服装についても考えた。その際、以下のように衣服の色彩と文様とに重点を置き実施した。

(a)色彩

衣服の色を季節にちなんだ植物や風物の名称で呼び表した。

例えば、紫系統の衣服について、春には「菫」や「藤」、夏には「紫陽花」や「朝顔」、秋には「竜胆」や「桔梗」というように表現していった。これにより実際の草花を想起し、その季節の中で「季節感を装う」ことを提案した。

(b)文様

衣服の文様には具象的なものと抽象的なものとがあるが、具象的な植物や風物をかたどった文様は、まさに季節感を表現するのに最適である。そのことを強調してうたい、タイムリーに装うことを提案した。また、抽象的な文様については、「春霞」、「清流」、「穀」などの季節の風物ともなる呼称を用いて表現していった。

3. 対象者

Aさん：79歳。女性。脳梗塞による左半身マヒ。食事は時間をかければ何とか自分でできるが、衣服の着脱、排泄はいずれも全面介助を要する。移動は車椅子による。4人部屋に入居。

Bさん：80歳。女性。脳梗塞による右半身マヒ。軽度の言語障害あり。食事は1人で行うことができる。衣服の着脱、排泄は時間をかければ何とか自分で出来るが、一部介助を要する。個室に入居。

上記2名の入居する特別養護老人ホームにおいては、夜間入浴が週2回実施されており、日常着は入

浴の翌朝取り替えることになっている。そのため、失禁等で汚してしまうことがない限り、次回の入浴までの3~4日間、昼間は同じ衣服を着続けることになる(ちなみに夜はパジャマに着替えている)。

4. 結果と考察

4.1 衣生活の見直しと装いに対する新たな発見

[Aさん]

初めてAさんを訪ねた際、Aさんは不定愁訴のためベッドから起き上がれない状態であった。何度か訪ねながら体調の良いときに働きかけを行った。

筆筒の中の衣類を見せてもらおうと、衣服の数がとにかく多く、しかもほとんどの物が丸められた状態で無造作に詰め込んであった。このことにより、沢山の衣類を持ちながらいつも、洗濯して仕上がり、職員が筆筒の引出しの一層上に置いて行った同じ物だけを着てきた状況が推察できた。

時間をかけ、1枚1枚についてそれらにまつわる話を傾聴しながら分類整理し、確認していった。

次に、上衣のブラウスやニット類とズボンを人台に着せてコーディネートしていき、本人の意見、感想を聞いた。このとき、コーディネーションをわかりやすくするために、上衣の柄の中の一色と同色のズボンを組み合わせる方法を取り、本人にもこの旨を説明した。すると、「へー、いいね。これ本当にあたしの服?」「あー、こんなの持ってたかしらねえ。知らなかったよ。忘れてたんだね」という驚きを示した。そして次に「こんなに良くなるんだったら(持っている服を)どんどん着なくちゃね」という発言へと発展した。そして、組み合わせの中のどれかに着替えてみるかという問いに対し、「この組み合わせがいいね。これを着ようかね」といって、一番派手な色のコーディネーションを選んだ。着替えた後は「こんなおしゃれができて嬉しいよ」と終始ニコニコしていた。その後、徐々に自分自身の衣服を見直すようになり、コーディネートしたものを着たいとの意欲を示すようになった。

[Bさん]

ファッションコーディネートの活動について説明すると、「おしゃれなんて、こんな体になっちゃったからもうダメなんです…」という悲観的な発言ばかりをした。しかし、持っている衣服を見せてくれ、「家にはまだまだ沢山あるですよ。今度(自宅に)帰ったら、もっと持ってきて見せますから

ね」と、筆者に対し衣服を提供し協力しなければと氣遣う様子が見られた。Bさんは衣類の整理や季節毎の入れ替えについても自分自身で行っており、筆筒のどこに何があるのかを良く把握していた。

人台を用いて何種類かの組み合わせを行い、どれが好きか、またどんな組み合わせが一番良いか尋ねていくうちに、自分のためのコーディネートであることを理解し始め、単なる一般的な感想ではなく、自分が着ることを前提として意見を表出し始めた。

Bさんにとって、ズボンははきやすいことが一番の条件であるらしく、しかし上衣はその時々で気分によって気に入ったものを着てしまうため、しばしば柄物の上衣に柄物のズボンという統一のとれない組み合わせの服装をしていた。

そこで、柄物のブラウスには無地のズボンを、無地のブラウスには柄物のズボンを、というふうに組み合わせを行って見せ、「こういう組み合わせで着たことがあります?」と尋ねると、「こういうのは初めて。だけど、これいいね」と、色々な可能性のあることを初めて知った様子であった。

また、ややあって、ベッドサイドの引出しから「私、こんなのもいっぱい持ってるんですよ。でも、どうやって使えばいいかわからないから、しまえばなしなの」と、ネックレスを出して見せてくれるようにもなった。

この働きかけを通し、多かれ少なかれ衣生活そのものに対し無頓着になっていた利用者が、自分の衣服そのものを見直すようになっていったことがわかる。自分自身が装うための衣服であることを再認識したのである。いままで改めて考えてみもしなかった衣服であったが、これらを入台に着せて客観的に、しかも立体的に見ることにより、新たな可能性を見出したのであろう。それによって再び装う主体者となって自己表出しようとする意識を取り戻したと解釈することができる。

また特筆すべきことは、衣服を1枚ずつ確認する作業を行ったことがきっかけとなって、その衣服にまつわるエピソードなど、過去を回想し懐かしむことができたことである。このことは、過去の自分の姿を追認することを通じて、現在の自分自身を確認することにもなった。さらに、自分の衣服への愛着も取り戻し、情性的になりがちな日常生活の中にスパイスを利かせる役割となったと思われる。

4.2 自然感情を踏まえた装い

(a)色彩

【Aさん】

藤の花の季節に訪問した際、Aさんは「気分がすぐれない」といってベッドに横になっていた。しかし、筆者の顔を見るとすぐに起きてくれ、コーディネートを行いたい意志を示した。そこで、次回の入浴の翌朝から着る服装を決めるため、次のような働きかけを行った。

筆者：今日は良いお天気ですね。外には色々なお花が咲いてますよ。さっきここへ来る途中、ご近所のお宅の藤棚に花が満開で、とってもきれいでした。

Aさん：へー、そう。藤の花があったの。あたしは紫が大好きでね。だから藤の花も大好きよ。

筆者：それなら、藤の花をイメージした服を考えましょう。ほら、このズボンは藤の花の色ですよ。このブラウスの柄の中にも同じ色が入っていますから、これとこれを組み合わせましょう。外で藤の花が満開の時にその花と同じ色の服を着ているなんて素敵だと思いませんか？

Aさん：そうね。いいねー。ほんと、いいよ。気持ちがワクワクしてくるよ。これに決めるよ。

その後もAさんはこの“藤の花の組み合わせ”がたいそう気に入ったらしく、何度も着用し、職員たちに得意そうに誇示したとのことである。

Aさんは1で行った働きかけにより、装いに関心を示すようになっていたが、しかし身体的事情のため、1人で好きな時に着替えを行うことが不可能である。そこで、次の入浴までの3～4日間着続けることになる衣服は本人にとってより納得のいくものでなければならない。ここでは現在咲いている季節の花の色を装うこと、つまりは季節感を表現するという普遍的な動機づけを行うことにより、満足感は揺るぎないものとなったのである。

(b)文様

【Bさん】

季節が春から夏に変わり、一緒に夏の装いについて考えることにし、筆筒の中を確認した。するとその中に、胸元にひまわりの花の刺繍が施されたグレーのサマーセーターがあった。

筆者：いよいよ夏本番で、暑くなりますね。夏といえばひまわりの花ですよね。いま、咲き始めてますよ。

Bさん：そうですね。ひまわりは夏、家の庭に沢山咲きましたよ。私が（種を）蒔いたの。

筆者：そうなんですか。それなら、ひまわりの花が咲いているときに、このニットの“ひまわりの服”を着ることにしませんか？

Bさん：そうですね。着てみましょうか（と、関心を示し頷いた）

筆者：Bさん、本当のことって、いま、はいていらっしゃるこのズボンとこの“ひまわりの服”はちょっと合わないと思いませんか？それよりのこっちの黒のズボンのほうが合うんじゃないでしょうか？どう思います？

Bさん：そうね。そうよね。それはそうですけど…でも、この黒のズボン、あんまりはきやすくないのよ。私、自分でトイレへ行くでしょ、だからちょっとダメね。

この頃、Bさんはいつも色違いの2本のズボンだけを「はきやすいから」という理由で、交互に用いていたのである。

ところがその後、たまたま筆者が施設に用事があって訪ねたところ、Bさんは例のひまわりのサマーセーターを着て、明るく笑顔でわざわざ出迎えてくれた。そして何と、合わせていた下衣は、例の「はきやすくない」とっていたはずの黒のズボンであった。筆者はこの日に訪問することをBさんには全く知らせてはおらず、Bさんは正に自分の意思でこの装いを行っていたのである。

ここで、Bさんは季節の植物の文様をその季節のただ中で用いたが、このような普遍的な動機により装われたコーディネートは、彼女にとって心底納得のいくものであり、さらにこのとき、自然と一体化しているという充実感も持つことができたと思われる。なぜならば、「はきにくい」とっていたズボンを多少無理をしてでもはき、“ひまわりの服”のコーディネートをを行っているからである。ここでは完全に表現性が機能性を越えており、衣服の精神性が機能性に勝ったことを意味しているといえるのである。

以上のように、季節を背景とした自然感情という、誰もが共通に持つ普遍的な要因に基づいて表現する装いは、内面の充実感をもたらし、何よりも自

信の持てるものとなるのである。

ただし、この自然感情に基づく働きかけにおいては、季節外れにならないよう、配慮することが大切であろう。我々日本人は、昔から色彩名を四季の植物や風物の名称で呼び表してきた。また、和服の文様に代表されるように、季節の文様はその季節の中で、あるいは季節を先取りして用いるという文化をもっているのである。高齢者はこのような文化を肌で感じながら生活してきており、それらを習慣的に心得ているのである。このような特性を持っていればこそ、この働きかけが有効なものとなったといえよう。

5. 評価

この働きかけを実施するに当たり、Aさん、Bさんの入居する特別養護老人ホームの寮母主任にあらかじめ協力を依頼し、2人の日常の様子について経過を追って観察を行うとともに、事前、事後の様子についての評価とコメントをいただいた。その結果をまとめると以下の通りである。

【Aさん】

働きかけ直前には不定愁訴のため、「具合が悪い」といっては寝込んでばかりで、〈表1〉のように1日中ベッドに横になっている日が続きがちであった。そのため、ALD (Activities of Daily Liv-

ing: 日常生活動作) のレベルも大変落ち込んでいた(しかし、医師の診断では「異常なし」とのことであった)。

その後、ファッションコーディネートを進めていくうちに、気分の悪さを訴えることも少なくなってきた。身体的状況から判断すると、最初の頃の様子で行けばADLレベルは相当落ちてたはずなのである。しかし、現在もそのままの状態を維持できているところを見ると、精神面での活性化が大きく影響していると考えられる。

もともとおしゃれには興味があり、また、目立ちたいという願望が常にあるため、この働きかけは行事などの折に特に有効であった。様々な行事に参加する際、ただ出席するだけでなく、服装によるおしゃれをすることで、より満足感が高まっているという様子である。

【Bさん】

働きかけ以前から身だしなみには気を配ってはいたが、何事にも遠慮がちで、自分から意志を表明することもなく、決して目立つ存在ではなかった。しかし働きかけを通し、自らの装いにことさら工夫を凝らすようになり、特に施設の外部の人と接する場や外出、外泊旅行などの際には、思い切りおしゃれをするようになった。とりわけ、装いの随所随所でネックレスを用いるようになったことは驚きであ

表1 Aさんについての評価

生活面

質問項目	働きかけ前	働きかけ後
食 欲	食欲はあるか等	食前、食後にめまい等の気分の悪さを訴えた。ベッドで食事をとることが多かった。
睡眠	夜、よく眠れるか等	夜間せん妄はあるがよく眠れる。
離 床	昼間、横になっているか。	毎日、長時間横になっていた。「(「気持ちが悪い。寝かせてちょうだい」という訴え)
身体 の 整 容 等	身体の衛生についてどうしているか等	入浴は機械浴による。入浴は自立浴による。トイレ誘導の際、トイレ内での立位が可能となった。

社会面

質問項目	働きかけ前	働きかけ後
コミュニケーション	自分の意志を相手に伝えることができるか。また、積極的に話しかけるか。	職員に対し、心身の訴えが多かった。(めまい・痛み・かゆみ等々)
行事	行事に進んで参加するか。また、参加して楽しそうか。	行事には進んで参加し、楽しそう。
社会性	周囲の人に対する関心はあるか。	自分だけが認められたいという願望があった。(ライバル意識が強い。)
衣生活	衣服に対する関心や工夫はあるか。	職員が出した衣服をそのまま着用していた。

表2 Bさんについての評価

生活面

質問項目	働きかけ前	働きかけ後
食欲 食 欲	普通	同
睡眠 夜、よく眠れるか等	時々、失禁する。	夜間の失禁が全く無くなった。
離床 昼間、横になっているか。	離床している。	同
身体 身体 の 整 容 等	顔や髪の手入れを自分でやっている。	同

社会面

質問項目	働きかけ前	働きかけ後
コミュニケーション 自分の意志を相手に伝えることができるか。また、積極的に話しかけるか。	どうにもならない時にのみ、夜間コールを行っていた。(それまでは限界までがまんしていた)	夜間コールが多くなり、希望を出せるようになった。「(ふとんをかけて欲しい)」「トイレに行くので靴を穿かせて欲しい」等々) 職員に対し、自分から進んで洋服を見せようとして話しかける。
行事 行事に進んで参加するか。また、参加して楽しそうか。	行事には進んで参加し、楽しそう。	施設外の人と接する行事には、特におしゃれに気を配り、積極的に参加する。
社会性 周囲の人に対する関心はあるか。	施設内・外の人に対する関心は少ない。	施設外の人に対し、進んで自己表出しようとするようになった。
衣生活 衣服に対する関心や工夫はあるか。	自分自身でそれなりに考えていた。	大変熱心に考えるようになった。

る。(これはいままでは決して見られなかった行為である)。

また、働きかけ以前には、夜間コールを押すのは我慢の限界に達したときのみであったが、働きかけ以降、夜間コール等を通し、願望を表出することができるようになった。その結果、夜間の失禁が全くなかった。

6. まとめ

高齢者が装いに関心を向けることは自分自身を見直すことにもつながるといえるのではなかろうか。衣服は自分自身と一体化するものであるため、装いにより思い切り「自己表現」することは精神の活性化を起し、生きる意欲を高めるものともなる。

その際、自然感情を動機とした表現は、この主観的側面が誰にでも共通するものであり、かつ普遍性を持つものであるが故に、他者の共感を得ることが約束され、そのため自信の持てる満足度の高いものとなるのである。

さらに高齢者が自然に思いを巡らすことは、自然と共にある自己の存在を再確認することにもなり、四季は必ず巡ってくるという確信から、次に来るべき季節、ひいては未来への希望をも広げることが可能となるのである。

今回行った働きかけに用いた衣服は、特別に誂えたり購入したものではなく、利用者が現在所持しているもののみである。衣服という“物”ではなく、コミュニケーションを通じての衣服を装う“思い(想い)”に重点を置いたつもりである。昔から着用している衣服は、あまりにも見慣れているがために新鮮さを失ってしまっている場合もあるかもしれない。がしかし、それらを改めて見直し、そこに新たな気分を発見することも十分に可能なのである。それは、高齢者ならではの長い人生の過程で作られた数々の思い出と、そこで獲得された感受性やそれらを背景をした文化に対する愛着があればこそ可能となったのではなかろうか。

この点から考えると、今後、高齢者にサービスを提供する人々は、単なる肉体のケアを行う技術者に終わってはならない。コミュニケーションを通じ、ケア利用者と深遠な精神世界を共有し、共感し合う努力をしていくべきであろう。そしてそのためには、自然を享受し日常生活の中に美を発見することのできる感受性を養うとともに、四季の移り変わりの中で育まれた我々の文化についての素養も培っておくべきではなかろうか。

本研究を行う当たり、ご理解いただきました特別養護老人ホーム愛老園園長羽島守先生、ならびに、

ご協力いただきました寮母主任福島澄江氏に深く感謝申し上げます。

参考文献

- E. H. エリクソン, J. M. エリクソン, H. Q. キヴニツク; 老年期, みすず書房 (1992)
谷田閼次, 石山彰; 服飾美学・服飾意匠学 (お茶の水女子大学家政学講座9), 光生館 (1976)
谷田閼次; 生活造形の美学, 光生館 (1978)
木下康仁; 老人ケアの社会学, 医学書院 (1995)

山岸裕美子 (やまぎしゆみこ)

群馬社会福祉短期大学 (〒371-0823 前橋市川曲町191-1, TEL. 027-253-0294, FAX. 027-254-0294)

海外資料研究部会入会ご案内

世界各国の繊維技術情報を

より早く, より広く, より正確に把握するために

海外資料研究部会へご入会下さい

本学会海外資料研究部会におきましては, 海外各国から, 我が国にもたらされる, 繊維に関する数多くの情報を逐一検討し, それらを工程別, 分野別に分類, 整理の上, 速やかに訳出し, 「海外繊維技術文献集」を通じて定期的におとどけしています。

世界各国における研究状況, 技術開発および市場動向等, いち早くその関連業界の流れを的確に把握するため, 本研究部会へのご入会をおすすめします。

事業内容

1. 海外文献, 資料の蒐集整備

海外各国より毎月100数種の文献, 資料, 所報, 社報, カタログ等を入手しており, これらの整備充実をはかり, その内容を訳出して会員に紹介しています。

2. 海外繊維技術文献集 (月刊) の刊行

毎月入手する多数の文献や資料等をそれぞれの分野の専門の委員によって, 工程別に分類, 整理の上, 速やかに訳出して紹介する海外繊維技術文献抄録と, 繊維並びに繊維機械に関する基礎的研究論文, 実際研究及び新製品や新しい技術の紹介等, 比較的重要と思われるものについては全訳して紹介する海外繊維技術文献集を合冊して, 機関誌として定期的におとどけします。

編集, 訳出, 査読等は全国各大学, 研究所並びに会社所属の専門の方々に依頼し, その正確流暢を期しています。

3. 海外文献紹介講演会, 座談会の開催

海外文献に掲載されたもののうち注目すべきもの, あるいは海外で行われた講演会, シンポジウム並びに見本市等につき, 随時紹介講演会, 座談会を開催します。

4. 海外文献, 資料の複写頒布

会員に限り, 本会所有の文献, 資料の複写頒布を行っています。

5. 申込方法

申込書をご請求下さい。見本誌を進呈しますので, ご希望の方はお申し出下さい。

購読料 1部 定価1,575円 (本体1,500円) (送料76円) 部会費 (割引購読料) 年間12,600円 (消費税込み)
〒550-0004 大阪市西区靱本町1-8-4 (大阪科学技術センタービル)

日本繊維機械学会 海外資料研究部会 (TEL. 06-6443-4691)
(FAX. 06-6443-4694)